

包はシステムにより大石雄介が主宰します。

システム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿がシステムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることができる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. システムの新しい仲間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。

＜当送稿はシステムによります＞

包11号目次

大石雄介句録(4) / 大石雄介

包  
お  
11号  
2001.12.1



大石確介の録 4 (H13 7/1 7/1)

六月の影となる鳩の大きな目

夏の燕腹見せる裸見せる如く

己が頬段って六月を了るや

くを憎むこと断たれたる百合の花

人を打つより己れを打って梅雨の部屋

炎天や猫は轢かれて厚くなれり

殺さまばったのおおまかな緑かな

1

7/2

7/1

七月の自転車首も胸も抜かれ

蠅取蜘蛛の巣も暴いてほひょんぴょんすよ

虫を磨くように皿磨くかな

沙羅の木の実とこの夏をゆくなり

少し頸をあげる扇虫機と同居す

原色蜘蛛類凶鑑を机上にからっほかな

ガラスにのこる蝸牛の痕傷をなせり

隣家一歳の子と朝曇して我は

おまゝ大きな揚羽になつたよ

椿の葉の夏瘦せかほくより心配です

2

7/3

橋上の人に梨畑は見えぬらし  
 蠅取蜘蛛のせわしい交尾を見ていた  
 こおろぎの足のまうな養殖草かな  
 肩の痣ひとつが銀河のそこに  
 木賊木槿ほくは朝から昼寝する  
 月に蝕はいまつていて青かなぶんかな  
 歪んでゆくギターは夏の日のかな  
 夏帽ついでして部屋を空間となせり  
 シヤツの形かどうにも力からぬ扇風機  
 花<sup>はな</sup>潜<sup>ひそ</sup>か君に潜りたかつてならぬ

2/6

2/5

4

ハーネスを貴具を提げて夏の暮  
 犬の糞に銀蠅も来ぬ静けさなり  
 明神岳<sup>アカ</sup>は大西日より向こうの山  
 ギツギツと鳴くはかまつかか野犬か  
 落書きは大花火性器をインド  
 炎天の梨畑は漂流<sup>な</sup>れゆけり  
 かけつはなしのラジオか梨棚のヒトラ  
 木賊かまうやく来たさあ過ごそう  
 花ながきピラーアボテンと脇見せあう  
 アンテナの白錆は夏空にも負けない

2/4

3

げそつと立っている鰻の穴釣かな  
 君を包む君を暴く七夕の日  
 翁座機と足許に待らして泣けよ  
 七夕一日の頭頂の薄きことよ  
 冷房に歪みある新屋外は豪雨  
 君は矛盾を打って真昼かトジス河  
 足高蜘蛛がいるよそこの銀河の横  
 青胡桃路上にくだき黒き落書  
 落書齧の花火を蹴る胡桃の木  
 缶コト遺棄されて露草の目や鼻

2/8

6

黄たてはかゆつくり己れの羽と遊ば  
 球状の傷抱く青鷺でありき  
 明神岳が麓と力かたれぬほど青むす  
 わか胸腹の鷓鴣天啼かチユチユとやれり  
 花潜一頭の空というへきとき  
 七ちやハちやいう猫と葭原の日なり  
 梨に袋を打ち変えてはおろおろす  
 皇言の日のかまつか石噛みあう  
 枸杞の花は木に着く虚は虚に着く  
 葭原の顔して五位鷺の子が出てくる

2/7

5

手花火と癩癩玉のあと黒華  
 冷房や小さな日を屋根の上に  
 大いなる足高蜘蛛と同じ日に  
 蠅取蜘蛛かたしかにいる昼寝かな  
 ひとつ洲か消えて青胡桃かほじまる  
 塩辛とんぼも青鷺も尾を閉じるよ  
 七月や犬の蓮団子状になる  
 夾竹桃のさき寺の屋根何か金  
 黄たては三頭にわかにはれやまぬ  
 人は澄んで塩辛とんぼ土噛みいる

蛭蓆の花を立てる日日に遭いぬ  
 君ら矛盾は利るなかれりなかれ夏草  
 黄菅すむに花終えているまた別れる  
 犬もく夫婦に蛾の夜の縁夜かな  
 光弱き螢と賞ずも一日のこと  
 音楽とも見える箱が夏川に  
 黄のカン十かゆいいつ恨に堪えたり  
 黄たてほに黄が強くなるがれ始まる  
 かたばみの夏花の黄を瞳とせよ  
 柳の木は牙のあとか唾のあとか

七月の鉄塔は娼婦のかわいい名を  
 青かなふん乱舞させてわが夏風邪  
 青いまで大玉芯を吊るす家  
 棒に乗る雌の雉トビの目が見えるよ  
 雌の雉の汝が接吻は刻刻あれ  
 雌の雉は夏草に入らば潜カクレめよ  
 大ひく紐ヒモつなびつないで花火の子  
 雉は隠れぼくは剥き出しの夏かな  
 雌の雉かぼくと同じくらいひ落ちけし  
 七月の箱という箱の音涙

霧吹かぬ霧吹もて短衣を劃す  
 月が見えると足高蜘蛛に言いきり  
 膝突くことは次のかたち葛の花  
 夏草や膝を突けば膝あるなり  
 向日葵に紅が交まじり起きてこいよ  
 藪ヤブ草クサ麻アサのるの朝露に喻たとえん  
 朝すでに汗の體投テウるによし  
 尾の白い燕と尾の裂きれた燕ぼくら  
 百日紅はクレイン腹部を鏡とす  
 七月の富士はもとすじ痕の音

七月は鶴の子を見ず真直なる  
朝から昼寝して半身痣なす夢  
漆青葉を時過ぎてゆく平うちつつ  
籠球ボール洲に暴されて猫のよう  
大きな葉は大きなまきに夏の川  
七月の水銀灯かならず日と返すよ  
夏のこのはじめに枇杷の葉が見えるよ  
夏痩せ同志で陰まで舐めあうか  
蜘蛛の子いっほいい生してこの家は南天  
今年死すべき足高蜘蛛と暑に堪えいる

悪人我を打つ悪人の青鷺かな  
夏雲やここを戦場にするという  
夏雲や鳥の紅々なこちらを向く  
夏山の蟹のような音楽学校  
欠けながらも屋根三つ覆う月かな  
ズッキーニという大物が曉けの卓に  
短夜のぼくら自動点灯に暴され  
起こされてめまつよいぐさに眩暈す  
あじさいの咲けたると一列に暴すよ  
米茄子とい塊と向きあうかな

夏の暮るんに細くて大丈夫か  
日して乾坤奇妙な管あられ  
今日咲くめまつよいぐさの雷性器  
夏の暮だとか問ころかりゆく  
へたへた走る人たち夏の暮  
檀の実青くてかたくてこの家の人  
洋種山牛蒡断種されたる詰草原  
よいさいの呆けなると同じ息す  
月見草開かぬのごぼん屋がひらく  
夏の暮子備校人なく自転車残置

夏曉半月の弦虚に交いるよ  
夏の朝のわか癒なすわか半月  
大き白丸夏の朝に交りだすよ  
夏の朝生老病者道の上に  
七月の朝日はとひかかてくるなり  
夏の朝日が象カタシとなるわか眼二つ  
夏曉きよう狂うこともありうる  
七月の朝日は我に狂器を刻めよ  
あの揚羽はわか脳天の果かな  
杉菜坂く人日が落ちてから饒舌す



夏顔と一緒に死んでみようか  
 目鼻分かたぬ夏の土籠か乾びていた  
 足の色を変えて精霊はったかな  
 四つ切の食パンとこの夏顔は完璧  
 真夏の夜に君は何変も入って来る  
 足高蜘蛛のいる台所に帰還せり  
 藪枯の花か蜥蜴の子の花らし  
 きのうと今日のわからぬ花潜かいるよ  
 木の椀の歪いびつは三日も暑くなるん  
 夏ぼては蟻螂の子と風に吹かれ

百日紅はじまる心に豊和ある日  
 目が覚めると花火殻や滑りあと  
 雉の真似する鴨が登にせんか  
 青空や花潜は金更きさらしおり  
 夏雲かかやわかエノラゲイ湧くよ  
 青田に落ちた車と引くほ蛭引くごと  
 向日葵は口かたかた鳴らすかな  
 自転車に自転車突っこむ夏の道  
 夏の川紅茶は瓶のかたちするよ  
 かまつかか子と連ねてゆく夏のり

此の痕いくつもつけて夏休めへ  
 昼顔にあらず目を開けて眠る子  
 打ったごきぶり拾っている間の銀河かな  
 とっくら蘭のとっくらに恨と籠めしか  
 螢光灯に隈か走る日蛾か瞬る日  
 こころ藻の花が塊っている夜かな  
 驟雨して路地ごとくに遠う花かな  
 ほくらほ青田むところ白濁すよ  
 隣人に交いつていくおしろいの花かな  
 次次かたちなき蜘蛛の巣のかたち

炎天の明神岳は音なくて打ち合え  
 炎天の千の川面ほりを離るよ  
 汗が溜まる君ならばどのあたりか  
 冷房下の鮫の瞳ニつとは思えぬ  
 君らは鳴らぬ雷鳴を数えていた  
 夏負けの猫の嘔吐をだいに埋めた  
 犬の糞花火殻乾坤のくらがり  
 ぬこいやらしの葉に血が入る火星かな  
 大毛蓼に笑われているような日  
 カンナ花終えていたり顎直す間

夏の夜の抱擁はあいたいに紡うよ  
 宙士へ上る火の道人間失いつつ  
 夏の夜のキラキラの星が揺れるよ  
 青い灯が二つ見えてる夏の暮  
 夏の夜の火星のあとと呼びべき時  
 銀河きれきれ君は今ごろ何を吸うか  
 処刑具の如きが夏の夜の道に  
 融とんご中学生は構曳らし  
 憂人や鯨雲のその上の空  
 部屋の中に葎箒を張れば體かな

紫玉葱まいて吊るす人は吊るすな  
 鴉の股間かわつと飛んだ夏の道  
 山百合を咲かせる家は矩形の家  
 赤のまん子の苺の斑の愛しけれ  
 梨棚から長い鳩が出てきた  
 暗渠瓜噴く日だった怪物とした  
 夏畑不可解中央に黄の大樽  
 塩辛とんぼの乾いたからだに当たった  
 おはぐろ蜻蛉の片羽碧き道かな  
 午後は冷房利かぬ平家から金星

向日葵の種か鏡となる日かな  
愛のあと氷菓と銀河かちかたし  
枇杷の木の上芽もて人は飛べよ  
青柳か枝に隠れるまた隠れる  
夾竹桃の赤は一人は堪えられぬ  
夏燕腹見せにきて声を出せり  
向日葵や雲の穴いと出来ている  
滝の神事は箒以て日を曲げ日を曲げ  
耳鳴りより蟬声より強い月なり  
炎天落ちて犬の毛など散らばって

夏の暮富士は火の道うごき出す  
清蕎麦とおはぐら蜻蛉数が合やぬ  
見えはいのた青梨からは行けぬ  
菊芋ではないか菊芋の黄の花  
夏の暮赤毛の犬か跳ねるなり  
汗は打てぬ犬かくわえる人の指  
助に来る痛みと木賊虫に揺れる  
洗濯機と水に冷やして昼寝をせん  
日曜ごと足高蜘蛛ごと検量す  
雨なくて夏川濁る叫うなかれ

火曜日ごとにサカ子採るわが隣人むす  
雷鳴より高き鱗雲のうろこ  
やくざ擬態する少女かな夏は  
駈頭なるなげやりな桃のかたち  
半透明な反人間的な鱗の鱗  
徐徐に徐徐に雀が夏瘦せに響くよ  
冷房が利いてる机のかたちかな  
夏の暮繩とびの子等は存在す  
夏草刈る人に天落ちることもあるよ  
炎天かつ落日燕狂いはいむ

大き葉を炎天の捨て猫かと思たり  
ギィと鳴くは不可解鳥の子か魚か  
寒天粉という物質を都屋の宙に  
路地間遠く夏の燕か荒れるよ  
冷房が利きだす火星の位置を思う  
南瓜一つ宙に打たれてありけり  
いまきれおれの銀河杯煮か死ぬな  
きれおれの銀河を抱りば跳ぬるかな  
炎天ゆく五位鷺の影か鳴くよ  
銀行の器具は水路のかたちかな

驟雨行きて軽鴨の子が流れたり  
学校嫌いの塩辛とんぼは雨に止まる  
雷雨上がる燕の腹は白きかな  
塩辛とんぼの交尾は雷文に通うよ  
雷雨上がって葭切の子が細いよ  
黄揚羽と書きき世界揚羽と書いていた  
七日で消えた不動産キャンパリン百日紅  
俺の目は俺なり全面めまっよいぐさ  
俺の目は俺なり同じ夏の堰  
梨棚のはばかりの梨の空気がな

夕焼けの明神岳は雲より近  
炎天の口赤き自転車と鴉  
明神岳や稲妻は黄と白をなせり  
驟雨してアメリカシロヒトリも濡れるよ  
驟雨して登夜灯は己れ点す  
こころ氷雨明神岳の空空気がたまる  
驟雨して穴のことき青空かな  
牙家打つ白雨なり寝て見ている  
消火器の赤か驟雨の中に点る  
驟雨行きてぬ帰ってきくと犬の唄

苦瓜か爆ぜると存在の子がいる  
 飛いこ<sup>れ</sup>と落ちる<sup>こと</sup>と薄羽黄とんぼかな  
 へ重咲きの栳榴ほ昼も夜もなき花  
 藻の花や昨夜の狼藉を可とす  
 夏田を来る四人ほぼくのどこに采るか  
 沢瀉の花かいちめん昼の銀河  
 葛の花こしこし大きなきみ捨ておろ  
 鮎引く人夜は汝か妻を引けよ  
 夏りのエロ本甚れろ大きき岩  
 芳枝爆ぜて始まりは乾いてゆく  
 (芳枝<sup>れいし</sup>||苦瓜)

松の板でつくる大箱夏の人たち  
 君を拭くようにわか汗を拭くなり  
 夏のカレシの何の種子か傷つくなり  
 沢瀉<sup>せきぞう</sup>と言い白花を伏せなり  
 青かなふん一頭が人の広場に  
 青かなふん一頭の青が青いよ  
 沢瀉の花頸<sup>あしな</sup>無の花人は吊るな  
 日傘して存在を遮りいるらし  
 夏畑や我を花火筒のこ<sup>と</sup>と立こん  
 燕の尾は赤しと思ふ家<sup>に</sup>帰る

荔枝爆せてかたちか我に入りくる  
荔枝爆せて我はここに有るに堪えよ  
夏川やはつきりしい鳥の羽  
乾坤向日葵は動かず人漂う  
荔枝爆せてぼくは言まれているなり  
荔枝爆せてぼくら沙漠でありけり  
荔枝爆せてこの部屋のかたちかな  
荔枝爆せて中学生は乳房かな  
荔枝爆せて人声は意味をなすな  
荔枝爆せて人を吊った記憶もある  
荔枝爆せて白き血に交わりたまよ  
夏の暮雀はぼくに浮いてとぶよ  
夏の暮うろこあるものは巣つと  
明神岳や曇り日の日は月に給う  
曇り日の夏日とまつまぐに立つこと  
曇り日の夏日は葭のまぐさきに  
曇り日の入日が夏の町引きやく  
輝くと目がらっている夏の果

荔枝爆せてかたちか我に入りくる  
荔枝爆せて我はここに有るに堪えよ  
夏川やはつきりしい鳥の羽  
乾坤向日葵は動かず人漂う  
荔枝爆せてぼくは言まれているなり  
荔枝爆せてぼくら沙漠でありけり  
荔枝爆せてこの部屋のかたちかな  
荔枝爆せて中学生は乳房かな  
荔枝爆せて人声は意味をなすな  
荔枝爆せて人を吊った記憶もある  
荔枝爆せて白き血に交わりたまよ  
夏の暮雀はぼくに浮いてとぶよ  
夏の暮うろこあるものは巣つと  
明神岳や曇り日の日は月に給う  
曇り日の夏日とまつまぐに立つこと  
曇り日の夏日は葭のまぐさきに  
曇り日の入日が夏の町引きやく  
輝くと目がらっている夏の果



夏の日や遊ばつた花<sup>は</sup>花<sup>は</sup>美し  
 明神岳の積乱雲は鏡かな  
 痛むほどニーツを灼いて人の世なり  
 チユンガチユンガと過ぎてゆけり夏の川  
 炎天ゆく乱世車には存在の子  
 夏帽をうらかえして引いてゆけり  
 四つ切の食パンと焼酎の籠かな  
 冷房が猫のような声を出すよ  
 袖無しは頸無し壁に吊られたり  
 夏休みだから羽虫しかわいいたし

昆虫図を空中に貼るごとくす  
 蚊遣りなる熊の絵が日日濃くなる  
 夏帽を四つに折つて四つの部屋  
 時計の文字盤ときどき山の虹を写す  
 犬の声いろいろ聞こえてくる昼寝  
 冷酒を白壁に貼る魚の十字  
 虫めかぬにて夏魚の爪を写す  
 冷房や鏡金してある文具いくつ  
 雲と遊ばし日月わか額かな  
 沢瀉と扱かぬ夏田は涼しいよ

—— 12号案内 ——  
αシステムにより発行は不定

包11号 定価 1,000円  
2001年12月1日発行  
編集・発行 / 大石雄介  
発行所 / 双弓舎  
〒250-0851 小田原市曾比  
2793 大石雄介方

自	豆	ほ	一
転	の	お	人
車	花	ず	た
の	ど	き	か
夜	れ	の	か
道	も	母	た
を	白	ほ	か
青	し	ろ	た
か	こ	あ	あ
な	こ	う	う
い	ろ	か	形
ん	ろ	赤	の
を	こ	く	夏
軽	そ	て	田
いた	家	身	か
		に	な
		映	
		る	
		よ	